

最近になって思うこと ー小さなイライラー

だんだんと歳をとってくると、ミスが多くなります。たぶん衰えなんでしょうね。そうなんですが、気持ちは「まだまだ往年の輝き」の部分があります。自分の衰えを認めたくないのです。

そういったときに、機械的なメッセージを送られると、時に、ワタクシの神経が傷つきます。

毎日のことですが、風呂を入れようとする、必ずメッセージが流れます。「**お風呂の栓はしましたか？**」これにいらつくのです。

確かに風呂の栓をしないで、大変な無駄をしたことがありました。そのときは非常にあわてました。とても反省しています。確かに悪うございました。申し訳ございません。

そう思っているのに、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、「**お風呂の栓はしましたか？**」と言われます。こう毎日言われると、神経にササクレが出来はじめ、だんだん傷が広がっていくのがわかります。

最近、イラっとしました。「お前なあ」と言いかけ、「人の心をどう思ってるんだ？」と語りかけますが、マシンは、相変わらず「**お風呂の栓はしましたか？**」と言います。

もうすこし言い方を変えて欲しいと思います。たとえば1年経ったら「ご主人様、お風呂のチェックはされましたか？夕子はお手伝いできませんので、よろしく願います」とか、「夕子のお願い、『お風呂の栓』」とか、に変えるとか考えたらどうでしょう。

ちなみに、自動車の運転をよくしていたころ、カーナビの馬鹿さ加減にいらついていたときには、カーナビを「夕子」と命名し、「夕子は馬鹿だなあ」と言って、楽しんでいました。(全国の夕子さん、すみません)



(M.S.)

ぶらぶら散歩 一鶯谷、谷中、上野一

すこし「充電」しようと思い、午後に半休をとりました。

ぶらぶらと鶯谷に足を向けます。お目当ては「子規庵」、正岡子規が病氣と闘いながら、必死に情報発信した庵です。感慨深いものがありました。子規が使っていた机に座り、子規になった気分を味わいました。縁側に腰掛け、庭をぼんやりと眺めました。「心が元気になる場所」でした。

その後、行くアテもなく、ぶらぶらと日暮里方面へ。谷中銀座にたどり着きました。アーケードの無い青空商店街です。懐かしいものを感じました。

商店街を歩いていると、おいしそうな「メンチカツ」が眼に入りました。なんだか有名なようです。「すずき」という店で、名前も気に入ったので（同じ姓です）、1つ食べてみました。¥200 でした。

店にはソースがありませんでした。「このまま食べろ」ということでしょう。すこし齧ってみて納得。胡椒が効いた味で、「このまま」がいいですね。アツアツで量もたっぷり。おいしかったです。

谷中には「サトーのメンチ」というものもあるようです。次回はこちらを食べてみよう、メンチ研究家（俺のことです）は思いました。

急にビールが飲みたくなりました。

足は自然と上野の「肉の大山」に向かっていました。

まもなく到着。時間は3時半。まだまだ陽が高い時間です。立ち飲みをやりました。

「やみつきメンチ」1個とナマ中を注文。するとびっくり。値段は¥280 でした。3時から割引があったのです。

今日2つめのメンチをかじり、ビールで流していると、隣に爺さんが来ました。大ジョッキをもち、メンチ1個をもっていました。常連のようです。少し会話をしました。

70歳を過ぎているようです。「75歳までは呑みたい」と力強く言いました。それと「大ジョッキでなければ、呑んだ気がしない」とも言いました。今後の我が人生の参考になります。よく見ると、アルコール半額を狙った老人が数名いました。3時からの常連のようです。メンチはおいしく、ビールとよく合いました。



(M. S.)

ロバート・キャパ／ゲルダ・タロー 二人の写真家 —写真のちから—

3月末、自宅のすぐ近くの横浜美術館で、写真展をやっていました。その存在に気がついたのが遅く、最終日の前日でした。仕方がないので、最終日の早めに行きました。ちょうどよい込み具合でした。

壁の目の高さに、昔のサイズの写真が貼られていました。いつものように 500 円を出して、音声ガイドを借りました。

Part 1 がゲルダ・タロー (Gerda Taro) で、83 枚の写真がありました。ゲルダ・タローは、1936 年、キャパと一緒にスペイン内戦を取材しました。ゲルダとキャパは同一行動をとっていたので、どちらが撮った写真か判別が難しいのだそうですが、最近の研究で判明した 83 枚を見ました。

右の写真がゲルダ・タローです。1910 年ドイツ生まれのユダヤ系ポーランド人です。聡明そうで、美しい人です。

ゲルダの写真で驚いたのは、ゲルダがひとりで取材に行って撮った写真類です。兵士の死体置き場、市民の死体置き場を取材し、遺体を写しています。ナチスに対する憎しみなのでしょうか、鬼気迫るものを感じました。

1937 年、ゲルダは、取材中に戦死してしまいます。26 歳の若さでした。

Part 2 がロバート・キャパ (Robert CAPA) でした。1932 年から 1954 年までの写真を見ることができました。

キャパを有名にした写真が右の 2 枚です。

1936 年・スペイン内戦の「崩れ落ちる兵士」と 1944 年、史上最大の作戦といわれている「ノルマンディ上陸」の際の兵士を撮影したものです。



崩れ落ちる兵士 (1936 年)



第二次世界大戦 (1944 年)

どれもリアリティに富んでいます。

この 2 枚のほかにも、第二次世界大戦で、ドイツの敗戦がほぼ決まったころ、フランス国内でドイツに加担した女性が市中に晒される姿や、日中戦争の難民の姿など、印象深い写真が多く並んでいました。

最も印象に残ったのが、右の写真です。1954 年、ベトナムで撮影されたものです。

右の道路上には、フランス軍のトラックと 2 台の軍用オートバイがあり、土煙を上げて走っています。その道端に傘をさしている一人の現地老人。そのコントラストが胸を打ちました。キャパの人間愛を感じました。

キャパは、この写真を撮ったあと、他の戦場に移動し、地雷を踏んで亡くなりました。

ゲルダの写真、キャパの写真。「写真のもつ力」を強く感じることができました。

(M.S.)



インドシナ戦争 (1954 年)

最近読んだ本

- ・佐藤優「新・帝国主義の時代 左巻・情勢分析編」中央公論社：『知の怪物』佐藤優さんの本。2009年から「中央公論」に掲載してきた論評を1冊にまとめたものである。Intelligenceの世界からみた政治の動き、外交、民族問題を解説している。小生も特許情報からIntelligenceを探る情報分析を生業としているが、まったくレベルの違うIntelligenceである。「国家は性悪」というスタンスに立った情報分析が主体で、政治家の発言から何を読み取るか、バチカンの戦略はなにか、イランの核開発と西側Intelligence機関はどう関係しているか、北朝鮮の行動の裏の考察などなど、深い読みが記載されています。
佐藤さんの力の源泉は、「古典の読破で形成された歴史観」にあるように思います。レーニンの研究、日本の共産主義の研究、ドイツの思想家リストの研究、イスラム教の研究などを通じて、古典を熟読し、自分の中に消化吸収し、いつでも使えるように準備しています。これが「情報分析」のパワーの源となっているのです。
はまってしまいました。佐藤さんの結論は、「いま、世界は、新帝国主義の時代になっている」ということです。
- ・佐藤優「新・帝国主義の時代 右巻・日本の進路編」中央公論社：『知の怪物』佐藤優さんの第二弾です。雑誌『中央公論』に2009年～2013年に渡って掲載されたものを、4つカテゴリーに分けて纏め上げたものです。「震災後の日本」「沖縄の基地問題」「北方領土」「帝国主義化する中国」のことを詳細に述べています。全部で26の項目に別れていますが、全部、歴史観の上に現在の状況を照らし合わせた考察を行っています。
4つのカテゴリーすべてに深い洞察と分析が加えられています。とくに母親が沖縄人である佐藤さんの沖縄基地問題は、沖縄人を亜民族として捉えており、根深い問題であることを認識させてくれます。また、外務官僚として深く関わった北方領土問題も、橋本政権時代からの流れが詳細に語られています。日本のエリートがいかに行動すべきか、それを語ってくれるのが本書です。とても面白かったです。
- ・白澤卓二「肥満遺伝子」祥伝社新書：この本は、遺伝子の研究に関する本ですね。科学の本です。大部分が21世紀、つまり、ここ10年の研究成果を語る本です。肥満が激しい国が、ユーゴスラビア、ギリシャ、ルーマニア、チェコであることから始まり、なぜそうなったのかの解析から話が始まります。肥満は遺伝するのか。なぜ人間は脂肪を溜めるのか。そういった話が続きます。
難しいですよ。途中で放り出さないでください。21世紀の研究成果が報告されています。「レプチン」というホルモンが食欲抑制の役割をしていること、「アディポネクチン」というホルモンが脂肪を燃焼させる作用をしていること、それに遺伝子がどういう役割を果たしているか。そんなことが書かれています。
回りくどい遺伝子の話をしながら、最後に著者が主張したいことを述べています。ズバリ言いますと、「**炭水化物は、中毒である**」です。炭水化物は麻薬作用を有する食べ物である。だから、炭水化物を取らなければ、人類本来の身体になるということです。でも、もうムリだなあ。炭水化物に60年以上もお世話になっている小生には、炭水化物の一日の摂取量を130グラム以下にするのは無理です。でも若い方には、読むことをお勧めします。
- ・壇蜜「蜜の味」小学館：1年ぶりに中学の同期が4人集まりました。男1、女3です。蕎麦屋で呑みました。そこで話題になったのが壇蜜。「壇蜜って秋田の生まれなのよ」から話が始まり、「XX学校の卒業に違いないわよ」と発展していきます。「チュウポーですよ」に壇蜜が出演していましたので、彼女のことは知っていました。また、通勤経路にある「東京駅構内・三省堂」に彼女の本があるのも知っていました。だから会話に追従できました。「秋田の生まれ」ということで急に親密感が沸き、本を購入しました。でもですね、買うのにとっても勇気が必要でした。本の装丁が「激しい」のです。恥ずかしくてたまりません。表のほうは彼女のエロい顔が大きく載っています。なので、本を裏返しにして店員さんに差し出しました。店員さんは若い女性でした。なんとか購入。
読んでみての感想。彼女は、少し変わっていますが、謙虚なごく普通の女性です。そういうワタクシも変わり者ですが。ホステスとしてではなく対等な立場で一緒に呑んだら、面白そうです。

(M.S.)